

牛久市文化財保護審議委員 栗原 功

岡見(尾上)家と小坂城 その3

—岡見(尾上)一族が築く—

小坂町字『筭崎』

—小坂城落城

—悲話伝説の地—

平山城・小坂城の築城に関する明確な記録の保存はないが、一説では岡見(尾上)一族の治房(牛久城主という記録もある)が、戦国時代(※)の天文3年(1534年)、または永3年(1523年)、または天文3年(1534年)に築城したとされている。※応仁元年(1467年)に起こった乱から、元亀元年(1570年)の織田信長政権確立までの100余年の群雄が割拠して互いに争った世をさす。

戦国の世のならいは一門の興亡であった。一門を存続していくために弱小豪族・岡見(尾上)一族が足高城・谷田部城・牛久城などに盤踞(ばんきょ)家では、天正(てんせい)元年は1573年になると、相模国(さかみのくに)の小田原城(現神奈川県小田原市)を本拠にする戦国大名・

北条家の傘下に入った。北条氏直5代で関東各地に支城城郭百力城を築き、領地300万石余に及んだ。初代の早雲は、戦国の七雄(しちゆう)・武田信玄・上杉謙信・毛利元就・織田信長・豊臣秀吉・徳川家康に挙げられている。その北条家の氏政・氏直父子は、常陸国(ひたちのかくに)の太田城(現常陸太田市)が本拠の戦国武将・佐竹義重と度々戦った。佐竹家は、清和源氏の源義家の弟義光を祖とし、家紋を丸に日の丸扇紋を用いていた。義重は19代目にあたり、鬼義重あるいは坂東太郎の異名をとり、常陸国をほぼ掌握していた。天正10年(1582年)に全国平定中の織田信長が京都・本能寺において倒れた。その翌年の天正11年、義重より、重臣の車丹波守猛虎が小坂城攻

めを命じられた。これに対して小城の小坂城は、車丹波守率いる佐竹の雲霞(うんか)の如き大軍に難無く落城した。城主岡見治房は、武運つたないことを知り、自害。気丈な奥方鷹(たか)の子の十王丸と藤姫を刺してから自害して果てた。後に、小坂城下に鷹愛用の筭(すう)が落ちていたところから『筭伝説』が起った。そのあたりは字地名・筭崎と名付けられた。また筭にちなんだ松の木と井戸があった。

各地で見られる

筭と落城の伝説

—葛尾城(現長野県坂城町)と筭の渡し

—忍城(現埼玉県行田市)を守った筭堀

葛尾城(城主村上義清)は、戦国時代の天文22年(1553年)に武田信玄に攻められ落城した。義清と奥方於子(おね)は別々に落ち延びることになった。山城・葛尾城の麓を流れる千曲川の対岸の力石に渡るさいに奥方は、わが身の危険をかえりみず舟を出して

くれた船頭の心に打たれ、お礼として髪(かみ)のまげにさしていた筭を手渡した。義清夫人を偲んでそれ以降、その渡し場は『筭の渡し』と呼ばれるようになった。忍城の城主は成田下総守氏長であった。天正18年(1590年)3月からの豊臣秀吉による小田原城(北条家討伐)攻めにさいして北条家に与していた氏長は、小田原城に詰めていた。忍城は、主将石田三成の秀吉軍に囲まれた。氏長は留守を預かる奥方真名は、家臣の妻たちと一緒に城内の外郭(そとくわ)に大掛りな壕(ぼり)を掘った。壕には真名愛用の筭が落ちていて、以来、その壕を家臣たちは『筭堀』と呼んだ。三成は、平城(ひらしろ)・忍城を水攻めにしたが堅固な守りに手を焼き小田原城開城後まで持ちこたえた。忍城が何故(なにゆえ)に守りが堅固であったのかは、将も兵も民も、老若男女がごとごとく心をひとつにして戦ったことであつた。



こしがいは日本髪(にっぽんかみ)のまげにさす装飾品で、金・銀・べっこうなどで作られ、広く庶民女性の間で用いられたのは江戸時代からである。—日本風俗辞典より—